

「茶旅」

”こぼればなし”

(4) タイ人がお茶を飲むようになった？

コラムニスト 須賀努



山間の静かな街に爆竹の音がこだまする。中国の旧正月前日に訪れたのは、タイ北部チェンライから車で1時間半の山中にある華人の街、メーサロン。タイ領内ではあるが、この山の上では普通に中国語が通じる特殊地域、人は俗に『国民党残党の村』と呼ぶ。中国の国共内戦に敗れた国民党の軍隊とその家族が、ミャンマーを経て、辿り着いた場所。今でも言葉だけでなく、風俗習慣も中国風を残している。

そのメーサロンはタイ最大の茶産地としても知られている。ここが茶産地となったのは、歴史的な背景があるが、いずれにしても国民党系の繋がりにより、台湾の全面的な支援を受け

て1980年代より本格的な茶畑が作られ、製茶が始まった。当然茶栽培

製茶の技術、機械は台湾よりもたらされ、タイ人が基本的に茶を飲まなかったこともあり、ほぼ全量を台湾へ輸出していた。初めは品質レベルも高くはなかったが、最近では中国や台湾から製茶工程を担う茶師を呼び寄せると、品質向上を図ってきた。

筆者もここ10年で数回訪れているが、来るたびに新しい変化が見られる。従来台湾向けの烏龍茶生産が多かった知り合いの茶業者、今では緑茶も紅茶も作っている。『売り上げの30%は欧米向けだよ』とさらさら言われ、ビックリした。今や台湾向けは殆どないらしい。高品質を掲げたこの茶

業者は『ペット飲料などの原料茶葉は作らない。全て手摘みで勝負する』としており、農業基準などの厳しいドイツなどヨーロッパで少しずつ認知されてきている。ただヨーロッパでは恐らくはフレーバーを付けて売られているのだろう。更に改善の余地がある、と彼らは考えている。

またここ数年は中国大陸への売り込み攻勢をかけ、ようやく北京や上海など大都市に販売代理店を確保、これから本格的に市場に参入するという。『自分たちの作った烏龍茶が台湾で大陸の観光客に買われている状況を見て、独自ブランドで勝負したい』と、中国各地で開催される茶業展示会などに足繁く通い、中国語が話せるという武器を使い、積極的に売り込んだ成果が出てきたという。それでもまだ中国向けは売り上げの20%にも届いていないため、今年も4月以降、また中国通いが続く。

そうすると売り上げの半分近くは、

どこで捌いているのか。『タイ国内だよ』、これも意外だった。以前は『タイ人は茶を飲まない』と言われており、最近ではペットの茶飲料を飲むのは常態化したものの、それなりのお金を出して茶葉を買い、茶を淹れて飲む、のは考え難かったが、今では『健康志向のアップパーミドルがまとめ買いしていき、友人に配るので口コミでも

随分と広がった』という。この茶業者では既に長男をバンコックに派遣して、販売拠点を整備、タイ市場の取り込みにも動いている。

茶畑へ向かう途中、アカ族の村では何と旧正月の餅つきが行われており、まるで日本の原風景を見ているようだった。アカ族、リス族、彼らが傾斜のきつい茶畑で茶摘みをし、茶園管理をする戦力である。人件費の上がるタイでは、彼ら無くして茶業は成り立たない。品質を高め、価格競争力を維持する、今後メーサロン茶はどうなっていくだろうか。

今回はもう1か所、チェンマイ郊外のリス族の村も訪問した。リスロッジというリゾート施設に宿泊、茶園ツアーが楽しめるという参加してみた。宿泊先から自転車で4km、更に車に乗って緩やかな傾斜地へ。この茶樹はアッサム種、葉が大きい。適度に植えられた茶樹、そこで自らの手で茶摘みをし、釜で茶葉を炒る工程を

見学できる。

非常に素朴な作り方だが、出来上がった緑茶は癖がなく、あっさりしていて飲みやすい。完全無農薬、化学肥料なし、昔からアカ族が伝統的に作ってきた手法を守り、小規模ならでは、丁寧に仕上げている。茶葉の輸出は考えておらず、近々バンコックの高級デパートにタイの富裕層向けに商品を卸していく計画がある。既に日本からも買付に来る業者がいるらしいが、何しろ小規模のため、茶葉を確保するには時間が掛かる。

メーサロンもチェンマイ郊外も、最近観光茶園がブームの兆しを見せている。お茶を飲まなかったタイ人いきなり茶を飲み、と言っても飲む訳はなく、健康に良いと言ってみても響かないだろう。まずは体験させること、自然な環境の中で香り高い茶をゆつたりと飲ませることにより、タイ市場は新たな展開を見せそうだ。

すが つとむ



チェンマイ郊外で手摘みされる茶畑